

博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

甲第42号

2005

創価大学

本号は学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条の規程による公表を目的として、平成18年3月20日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した甲は、学位規則第4条2項(いわゆる課程博士)によるものである。

創価大学

氏名（本籍）	森 信明（愛知県）
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第42号
学位授与の日付	平成18年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 創価大学大学院学則第17条第2項 創価大学学位規則第3条の3第1項該当
論文題目	創価教育学説の成立に関する研究 —— 日本の近代化との関係に注目して ——
論文審査機関	文学研究科委員会
論文審査委員	主査 熊谷 一乗 文学研究科教授 委員 木全 力夫 文学研究科教授 委員 坂本 辰朗 文学研究科教授

博士（教育学）学位請求論文審査報告書

平成 18 年 1 月 12 日

主査 熊谷一乗 教育学部教授
副査 木全力夫 教育学部教授
副査 坂本辰朗 教育学部教授

【論文の題目】

「創価教育学説の成立に関する研究—日本の近代化との関係に注目して—」

学位請求者：森信明

【論文の内容の要旨】

本論文は、近代日本における教育学説史において特異な位置を占めている創価教育学説が形成され体系化されるにいたる過程を明治期から昭和初期にかけての社会と思想の動向と関連させながら考察している。論文の構成は、本論がⅠ「研究の方法論的枠組み」、Ⅱ「思想的基盤の構成」、Ⅲ『『体系』の成立とその社会的思想的背景』、Ⅳ「理論的構造とその特質」、Ⅴ「創価教育学説の展開」の 5 編から成り、これに「序説・創価教育学説の思想的構造の特徴」と「結論・創価教育学説成立の特質」が加わるというものである。本論の 5 編は、あわせて 17 章を数え、これに「序説」と「結論」を加えると論文は、A4 版 525 枚にのぼる大部なものである。論文には、別に A4 版 10 枚の参考文献リスト、創価教育学説の提唱者である牧口常三郎の生涯と教育・社会のできごとを対照させた A4 版 12 枚の年表が付加されている。（なお、本論文では、創価教育学説が論述されている「創価教育学体系」全 4 巻が「体系」と略称されている。）

筆者は、まず昭和初期に体系化され世に問われた創価教育学説がすぐれた内容にもかかわらず、その全体像と成立の過程が教育学関係者の間で正確に把握されず、そのため、適切に評価されてこなかったことを指摘している。そのうえで、筆者は、「体系」全巻を通じて、A・コント、H・スペンサー、F・ヘルバルト、E・デュルケムなど欧米近代のさまざまな思想家・学者の理論や主張が取り上げられていることに注目し、創価教育学説の全体像と成立の過程を明治以降の日本の近代化の展開のなかで明らかにしたいという意図のもとに研究にとりかかったとしている。

「序説」では、創価教育学説の特徴と成立に関する主要なポイントが総論的に述べられている。第一に 1930（昭和 5）年から同 34 年にかけて刊行された「創価教育学体系」（以下『体系』）の構成の全体が紹介され、「体系」のキーワードである「価値創造」、および価

値について、その意味が当時の主流をなした理論的教育学で用いられるものとは、本質的に異なることが指摘されている。第二に「体系」が刊行されるにいたるまでの著者、牧口常三郎の経歴が創価教育学説の成立とのかかわりで述べられている。ここで旧制北海道師範学校の卒業（1901年）、同師範学校附属小学校訓導として単級教室を担当したこと、文部省中等学校地理科検定試験への合格、同師範学校を退職して上京し「人生地理学」を出版したこと、これを機縁としての新渡戸稲造を中心とする「郷土会」への加入、東京市内小学校の校長歴任、新カント派価値論・デュルケム社会学の研究といったできごとを挙げたうえ、筆者は、「体系」刊行までの牧口の経歴を幼少期の荒浜時代（1871-1884年）、北海道師範学校在学時代（1889-1893年）、同師範学校附属小訓導・主事時代（1893-1902年）、地理科教育研究・出版時代（1903-1913年）、校長時代（1913-1932年）の5期に分けている。第三点として「体系」が刊行された当時、教育学者、篠原助市が「博士論文とするに足りるが見識が浅い」と評価したと伝えられていることを取り上げ、哲学的観念論的教育学の観点からみた、この評価に科学的実証的で实际的であろうとする創価教育学説の特徴を見出すことができるとしている。第四に筆者は、「体系」4巻の各巻について、引用文をともなつて取り上げられている人物のリストを作成し、それぞれに登場回数・文章中に占める引用文の割合を記し、創価教育学説がどのような理論、思想の影響を強く受けて成立したかを明らかにしようとしている。この登場者リストにもとづいて創価教育学説の基礎理論編ともいえる「体系」第1巻で取り上げられている人物の45%が欧米の社会学者であることから、この学説における科学性・実証性の重視、近代合理主義の立場が明瞭にうかがえることを示している。ところが「体系」第2巻以降では、文章中の登場回数において欧米の学者・思想家と並んで日蓮がきわだつて多くなっており、創価教育学説が全体としてみると、科学と合理性を重視する近代主義の立場で貫かれているわけではなく、プレモダンに属する思想を摂取し媒介としてモダンの矛盾と限界を超えようとするポストモダンの世界を追求しようとしていたことが示唆されている。筆者は、「体系」における登場者リストによって、創価教育学説の主要な特徴を浮き彫りにしているわけである。

「体系」の内容が近代合理主義の立場を鮮明にした部分とプレモダンの思想に学びながらポストモダンの世界を追求しようとする部分とに分かれることに注目し、筆者は、第五のポイントとして創価教育学説の成立については、牧口が法華経への信仰に入る以前と以後の二段階に分けて考察されなければならないと述べている。創価教育学説は、第一の段階では、近代合理主義の立場をとり功利主義的相対主義的な価値論を展開したが、法華経への入信以後、その価値論は、絶対的規範的な性格のものに変容する、という筆者の見解で「序説」は結ばれている。

本論の第I篇では、まず第1章「先行研究の考察」で、創価教育学説についての従来の評価、主な先行研究を取り上げ、検討を行っている。先行研究については、1973年以降の論文・著作を対象に詳細な文献リストが作成、掲載されている。第1章では、創価教育学

説に対する日本教育史研究者・唐沢富太郎、心理学者・波多野完治、教育哲学者・村井実、三人のコメントが紹介されているが、それらは、「異色の業績」(唐沢)、「稀有の名著」(波多野)、「実証的な学問体系として教育学を作り上げようとした」(村井)など、いずれも肯定的な評価を与えた内容である。

論文・著作によって公にされた先行研究は、考察の視点、内容上の特徴から次の五つに整理されている。すなわち、①社会学的視点に立ってモダンとポストモダンとを対置する枠組みのもとに創価教育学説の全体像の把握につとめ、その現代的意義を明らかにしようとしたもの、②文化・思想史的な視点のもとに、教授段階説と統合教授論を特徴とするヘルバルト教育学の影響を特別に強調したもの、③教育史研究の視点から生誕の地・荒浜と修学の地・北海道における生活とその時代に焦点をあて特に「教授の統合中心としての郷土科研究」を研究の対象としたもの、④哲学の視点から価値論と宗教活動にともなう理論の展開を考察したもの、⑤米国の思想的伝統を背景に経験と生活への有用性を重視するデューイ教育学との共通性を強調し、創価教育学説をプラグマティズムの潮流のなかに位置づけたもの、である。

筆者は、以上の先行研究の一つ一つに検討を加え、とりわけ、創価教育学説をヘルバルト教育学、あるいはデューイ教育学の観点だけから考察し理解しようとする研究について、批判を展開している。まず、ヘルバルト教育学の枠組みのなかで創価教育学説をとらえようとする、創価教育学説を特徴づけている功利主義的特質やデュルケムの学説に同調し社会および社会学を重視する立場、さらに「生の哲学」への共感といった側面を見落とししてしまうことになる。またデューイ教育学と一体化させてしまうと、価値と真理を峻別し真理の普遍性に注目した創価教育学説の特徴をとらえそこなうことになる。そもそも知識体系は、一定の社会的文化的要因の相互作用関係のもとに形成されるものであり、その関係を生み出す背景の異質の側面を見ないで、ある知識体系を別の知識体系を基準にして、とらえるというのでは、対象となる知識体系の全体像やその特徴にかかわる本質的部分を見失うことになる。こうした批判を行ったうえで筆者は、欧米の思想・学問を摂取しながらも日本に特有の文化的伝統の基盤と社会的背景のもとに構築された創価教育学説をヘルバルト教育学あるいはデューイ教育学の枠組みに依拠してとらえ、理解することは無理であり、不適當である、と述べている。ヘルバルト教育学にせよ、デューイ教育学にせよ、外来の特定の学説あるいは知識体系によって、創価教育学説を解釈しようとする、一面的な理解しかできないだけでなく、知識体系によって知識体系を評価することにもなう虚偽性が生ずる恐れがある。こうした見解のもとに、東洋と西洋、伝統と近代とが交錯し葛藤しあう明治以降の日本の社会的文化的変化の過程のなかで創価教育学説の成立をとらえてみなければならないという筆者の方法論的立場が形成されている。

先行研究に対する批判的考察にもとづいて知識体系の全体像と本質的部分は、これを歴史的社会的要因との関連のなかで構造的に把握することによって明らかになるという立場から、K.マンハイムの「存在被拘束」のコンセプトに示唆を得て、知識社会学的視点によ

る研究方法の枠組みが提示されている。こうして本論文では、知識社会学的な研究方法論にもとづいて創価教育学説の成立と特質が考察されることになる。

第Ⅱ編「思想的基盤の形成」は、「思想形成の基盤」、「北海道師範学校時代の思想形成」、「創価教育学説の基盤としての『人生地理学』」の3章から成り立っており、幼少期から壮年前期（30 台前半）にいたるまでの思想形成のプロセスを時代的社会的環境との関係という点から、豊富なデータをもとに考察している。まず幼少期の人間形成について筆者は、牧口の生誕地、荒浜（現在、新潟県柏崎市内）の明治前期における社会的状況を「文明開化」のインパクトと伝統の影響という点から述べ、創価教育学説を成り立たせている思考パターンの基底にあるものを掘り起こすことにつとめている。荒浜周辺に展開された自由民権運動、同地における仏教寺院の存在や伝統行事についての詳細な資料をとおして、開明的合理的で立憲主義的な思想傾向をもちながら、東洋の思想に共鳴し仏教への信仰にいたる牧口の思考パターンの深層に光があてられている。北海道に移住した牧口は、1889 年、無月謝・給費制の尋常師範学校へ入学するが、開拓地の開明的合理的な雰囲気と満ちた環境と同校の教育的環境は、彼の思想形成に強く作用し、創価教育学説の成立に間接的、直接的に大きな影響をおよぼしている。牧口の在学した当時の師範学校では、功利主義的経験主義的な思想をもとにした英米系の教育学が教授されているが、この教育学説では、合理的な生活による幸福の獲得をめざすことが説かれている。また若林虎三郎・白井毅著「改正教授術」が教育学の教科書として用いられているが、この書では、ペスタロッチの影響の下に直観重視と開発主義の教育論が展開されている。筆者は、資料から牧口が師範学校在学中に学んだ教育学の教科書は、翻訳ものとしては、ジョホノットによる教育学書、日本人による教育学書では「改正教授術」であったといえる、としている。牧口の師範学校在学中、文明開化への反動として日本ナショナリズムが高揚し始め、これと軌を一にして「教育勅語」の発布があり、この勅語の趣旨にもとづく道德教育の拡充がはかれるようになった。しかし、牧口は、ナショナリズムと一体の道德教育論議よりも英米系の功利主義教育学、ペスタロッチに由来する開発主義の教育学のほうにより強く影響されたというのが筆者の見解である。

師範学校を卒業後、母校の付属小学校訓導に就任した牧口は、ヘルバルト派の教育理論と F.パーカーの教育理論に接し、前者からは教授段階説・多方興味説・観念類化説を、また後者からは社会としての学校・学級、そのなかでの共同生活・集団的活動をとしての学習という考え方を学び、自らが担当した単級学級の指導や論文に生かしている。とりわけ、単級学級を一つの社会として把握する立場は、教育上、社会を重視し学校を社会とみなして運営することを提唱する創価教育学説の前段階をなすものである。また社会重視の観点から、牧口は明治中期、吉田熊次らによって紹介された社会的教育学にも注目し、「社会的教育学の実際の方面」と題する論文を北海道教育雑誌（96 号、1901 年 1 月）に発表し、その考え方を彼の最初の著述「人生地理学」でも取り上げている。

現場の教員として牧口は、ヘルバルト派の教育学であれ、パーカーの教育学であれ、社

会的教育学であれ、導入される欧米の教育学理論に積極的に関心を寄せ、学んでいるが、その摂取のしかたは、決して「丸呑み」する形で無批判に全面的に受容するというものではなく、自らの教育実践の経験に照らし、今後の実践にどれだけ有効であるか、生かせるか、という点から選択的に受容している。それは、プラグマティックな受容のしかたであり、研究の態度であった。教育学は、現実の教育問題の解決に貢献すべきである、という創価教育学説の立場は、明治の中期から後期における牧口の実践志向的な研究態度を継承したものといえる。理論、研究への実践志向的でプラグマティックな取り組みは、青年期以来、牧口にとって一貫したものであったとみることができる。

第3章では、「人生地理学」を創価教育学説の基盤をなすものとみなし、その著述・刊行にいたる過程と背景、さらに同書の内容について詳細な論述がなされている。北海道師範学校で牧口が最初の地理科担当の教員に就任したこと、明治中期における地理教育および地理学の状況、19世紀末から20世紀初頭にかけての社会・思想の動向・社会学および社会科学の研究の状況について述べた後、「人生地理学」の内容の考察を展開している。「人生地理学」の思想的基盤は、「地人相関」、すなわち吉田松陰が弟子に説いた「地を離れて人となし、人事を論ぜんとせば先ず地理を究めよ」という言葉に集約されるとし、この書では、地球の自然環境と人類のいとなむ生活現象との関係、地球環境に制約される人間の生活と社会の構造が主題として取り上げられ、産業・経済の状態、国家・政治の問題が社会学・経済学・政治学・哲学・教育学など、多様な学問分野の知見が幅広く論述されている。牧口のいう「人生」は、「人の生活」の意味であり、「人生地理学」を特徴づけているのは、生活中心主義、そしてグローバリズム、有機体としての社会の重視、ヘルバルトの多方興味説に示唆を得た生活上の諸関係の価値論的考察である。生活中心の発想、グローバルな視点、有機体論的な社会観、価値の観点からの生活諸関係の考察―筆者は、この四つの点からみて、「人生地理学」は、創価教育学説の基盤をなす書である、とするのである。

「人生地理学」の内容は、内村鑑三の「地理学考」、志賀重昂の「日本風景論」から多大の影響を受けているが、内村からはグローバルな視点を、また志賀からは地理的特徴と人間のいとなみとの関係について、それぞれ学んでいる。なお志賀の地理学にはナショナリズムが溢れているが、牧口は、この点についてはあまり影響を受けていないとされている。

第Ⅲ篇『『体系』の成立とその社会的思想的背景』は、『『体系』への道程としての「郷土科学研究」、「小学校長としての教育実践と『体系』の成立」、「『体系』成立の基盤としての科学の思想」、「『体系』成立の条件としての価値論」、「教育学理論の展開における『生活』と『人生』」、「大正後期・昭和初期における社会と教育の状況」の6章で構成されている。

第1章では、まず明治末期から大正初期にかけての教育学、教育思想の動向に触れ、大正自由教育の流れが形成されるとともに、中島半次郎の「人格的教育学の思潮」が世に問われたことに象徴される観念的哲学的教育学の流行のきざしがみえてきたことについて述べた後、筆者は、上京して東京市内の小学校長に就任することになる牧口が「郷土会」に参加して新渡戸稲造、柳田國男らとの交わりを深め、実証的な地域研究を行い、「地方の発

見」をめざす活動にかかわることに注目している。さらにこのことに関係して郷土会で得た人脈が「体系」の刊行の支えになったことが指摘されている。

牧口は、1912（大正元）年に「教授の統合中心として郷土科研究」を、同16年に「地理教授の方法および内容」をそれぞれ刊行するが、筆者は、これらの著述を「体系」にいたる道程として位置づけている。とりわけ、「郷土科研究」には、創価教育学説を特徴づける価値の範疇を利・善・美とする価値論がかなり明瞭な形で展開されており、この書は、「体系」の前段階として注目されている。「郷土科研究」では、従来の教科並列型のカリキュラムを批判し、郷土科を中心に各教科を相互に関連づけ全体として統合する統合型のカリキュラムを実施すべきであるというカリキュラム改革の構想が示されているが、そこでは教育内容の同心円の拡大、身近な事象の直接的観察・経験による学習といった教育方法論が展開されており、教育学書として意義深いもの、と評価されている。「教授の統合中心としての郷土科」という発想は、ヘルバルト派の統合教授論の影響を受けたものである。ところで、「郷土科研究」は、日露戦争が終わって7年後に刊行されており、日本の資本主義、帝国主義がめざましく発展する時代の動向を反映し、ナショナルな要素を含んでいるものの、同時期に展開された他の教育学者による統合教授論と比較すると、国家主義的な性格は弱く、むしろ「人生地理学」の基本的パラダイムである「地人相関」の視点が鮮明で、ユニバーサルな性格の強いことがうかがえる、と筆者は理解している。

第2章では、小学校の校長としての経験が創価教育学説の体系化、成立に直接的な要因をなしていることについて述べられている。牧口は、1913年に東京市東盛尋常小学校の校長に就任し、1932年に同市新堀小学校の校長を最後に退職するまで19年間にわたり小学校長をつとめているが、この間に「体系」の第1、2、3巻が刊行されている。第4巻の刊行は退職の2年後である。このことは、創価教育学説全体の体系化、成立が牧口の小学校長としての教育実践とこれにもとづく思索の成果であることを示している。牧口は、小学校長としての実践的経験を媒介として、文献研究、先人・同僚の言説、さらに自らの体験をとおして得た知識・観念を発展させ、作文指導の方法である「文型応用主義」、学校運営のための「学校小社会論」と「経済的効率主義」、未来社会の形成者である子どものための「価値創造論」と「社会化重視論」、教育実践の水準向上をはかるための「経験からの帰納」「科学としての教育学の確立」といった創価教育学説の骨格をなす理念を確立するのである。筆者によれば、小学校長としての経験を抜きにしては、創価教育学説が体系化されて成立し世に問われることはなかったといえるのである。

第3、4、5章は、創価教育学説の理論上の骨格をなす科学的方法論、価値論、生活重視の立場について述べられている。牧口は、教育学を心理学、倫理学に依存しない独自の科学の体系として確立することをめざしたが、その背景として大正期に自然科学の発達の影響のもとに人文系の学問分野についても、H.リッケルトの文化科学、W.デュルタイの精神科学といったように、科学の概念が用いられるようになったことがある。ここで注目すべきことは、文化科学や精神科学が自然科学とは異なる方法論をとるのに対して、牧口が人文

系の学問分野に属するとみなされている教育学の構築のために自然科学の方法論をモデルとし、実証的帰納的方法による研究を強調したことである。

自然科学的方法による教育学の構築をめざした牧口が最も参考としたのは、デュルケムの社会学とその研究方法論、さらにその方法論から導き出された教育理論であった。牧口は、デュルケムから独立した学問分野が成り立つために必要な条件が何であるかを学ぶとともに、教育に関する社会学的な知見を吸収している。たとえば、デュルケムが教育現象を説明する場合のキーワードとした社会化（socialization）の概念は、創価教育学説のキーワードの一つとして取り入れられているのである。

創価教育学説の理論的側面において基本の位置を占めている価値論の萌芽は、「人生地理学」「教授の統合中心としての郷土科研究」にみられるが、その体系化、展開にあたって牧口は、すでに大正期に日本人よって書かれた教育学書に展開されていた哲学的価値論に刺激を受けながらも、その価値論をとらず、主に経済哲学者の左右田喜一郎「経済哲学の諸問題」に展開された価値論や経済学の分野におけるオーストリア学派の価値論を参考とし、研究している。牧口が受容したのは、左右田の説く新カント系の超越論的な価値論ではなく、オーストリア学派の主観的相対主義的価値論であった。

科学重視の立場と相対主義的価値論の立場を連結し統合するものを牧口は、「生活」と「人生」に求めている。信仰に入る以前に構築された創価教育学説は、「人生」の概念を中心として統合された科学重視と相対主義的価値論を支えにして成立したというのが筆者の見解である。

IV篇「理論的構造とその性質」は、序章で「体系」第1巻の冒頭で示された教育学建設の三つのスローガン、同第2巻の冒頭に掲げられた「創価教育の六つの指針」を解説した後、第1、2、3、4章で、創価教育学説の理論的な構造と特質について論述している。第1章「応用科学としての教育学」では、牧口が経験と実践への有益性を重視する立場から大正期から昭和初期にかけての哲学的教育学を厳しく批判し、社会学を「純正」と「応用」に分けた社会学者 L.ウオードの見解を参考に教育学を「応用科学」と規定し、その性質と研究方法を説いていることが述べられている。第2章「教育目的論における幸福主義」では、教育が人生と結びつけられ、教育の目的が親の子どもへの願いという点から考えられ、幸福であると説かれていることが明らかにされている。第3章『『価値論』の構造と特質』では、進行に入る以前に牧口が展開した「利」「善」「美」から成る価値論の内容とこれに関連して T.リップス、デュルケム、河田嗣郎、篠原助市の価値についての見解が検討されている。

牧口の価値論は、価値を真・善・美・聖に分けて論ずる規範的超越的な価値論を批判し、真理と価値を厳格に分け、後者を生命と人生に対する有益性という点から利・善・美の範疇でとらえる、というものである。それは、相対主義で、実際の功利的な性質のものである。筆者は、こうした牧口価値論の特質を浮き彫りにするため、同時代の理論的教育学を代表する篠原の価値論との比較、対照を試みている。牧口が真理と価値を峻別したのは、

前者が実在に関する法則的概念であるのに対し後者が人の生活現象の利害にかかわる関係概念であり、両者は、次元を異にする、と考えたからであることが述べられている。4章「価値論の変容—「善」概念の位相の変化」では、牧口が価値相対主義の限界を自覚し、信仰に入った後、「人生」中心から仏教で説く「法」中心へ、思想の基本を変化させ、価値論の内容に転換が生ずることが論述されている。この転換は、筆者によれば、宗教的な意味をもつ「大善」を究極の目指すべき価値とするもので、功利主義的価値論から大善主義的価値論へ、といえるものである。

V篇「創価教育学説の展開」は、二つの章から成り、牧口の教育改革論と教育方法論について論述されている。第1章「教育政策における民主性と合理性」では、小学校長登用試験の実施・教員養成機関の改善・視学制度の廃止・学校自治権の確立・半日学校制の実施など、民主主義的で合理的な教育改革案について考察されている。第2章「教育方法論の特質」では、「知行合一」の考え方を基底とする学習指導主義の提唱、安易な「個性尊重論」への批判、カリキュラム・教材の改革論など教育方法に関する諸提案が詳細に検討されている。

最終篇の結論では、創価教育学説の成立にかかわる諸要因が総括され、そこに見出される特質と意義を明らかにしたうえで研究についての反省と今後の課題が示されている。

本論文は、創価教育学説の成立を、牧口が明治初年に誕生したことに注目して日本の近代化における社会的変動と思想動向との関連で考察したものである。思想や知識の体系は、社会的文化的要因のダイナミックな連関のなかで成立するという知識社会学のテーゼを手がかりにして、同学説がいかに形成されたかをみたわけであるが、北海道師範学校を卒業する前後の青年期までに形成した開明的合理的で、功利主義的な傾向をもつ思想がこの教育学説を支える基礎的な意味をもっている、としている。筆者は、大正末期から昭和初期にかけて高揚した極端なナショナリズムに支配されず、むしろ、この国家至上の潮流に抗する立場で一方で民主的で合理的な教育上の主張を展開し、他方で「人生の幸福」「子どもの幸福」を強調したことにそのことが現れている、と述べている。今後の課題として、「人生中心」から「法」中心に価値論を変容させる牧口の思想的発展と法華経への信仰との関係を解明することが挙げられている。

【論文審査の要旨】

本論文は、学説の成立過程を研究の対象としたものであり、学説史研究の分野に属するものであるが、主に理論的側面について行われる一般の学説研究の枠を超え、マンハイム知識社会学における「存在被拘束」の概念を手がかりに学説の成立を社会的事実、生活史的事実と緊密に関連させて行われた研究の成果であり、わが国の教育学説史研究においてユニークな位置を占めるものと評価できる。創価教育学説を構築した牧口常三郎という

人物の幼少期にまでさかのぼり、その地域環境や時代状況など生育史的背景を実証的に調査したうえ、彼が青年期に受けた師範学校教育、彼の教員時代における教育実践と研究活動を資料にもとづいて丹念にフォローし、日本近代化の過程と重ねあわせて、この学説の成り立ちを考察している。この研究成果は、その研究の手法において、また研究の内容において明治以降の教育学史研究において特筆すべきものであり、日本の教育学研究に寄与するところは大きいと思われる。

創価教育学説についての研究は、戦後も1960年代以降、本格的に行われるようになり、牧口の全集が二種類刊行されているのをはじめ、すでに研究の成果が著書、論文の形で数多く公にされている。森信明君は、まず、主な先行研究を取り上げて詳細に検討し、それぞれの内容について浅く概括的なものであるか、片寄った視野にもとづき偏向したものになっているか、のいずれかであることを指摘する。先行研究への批判にたって彼は、知識社会学的な研究の枠組みにより、革新的な教育実践家によって書かれた創価教育学説の全体像と思想的基底を明らかにし、その特質を正しく把握することをおして、この学説の教育実践上、教育学説上の意義を世に問うことをめざしている。この問題意識と研究構想とは、教育実践とのかかわりの深い教育学説の研究上、注目されてよいであろう。

本論文は、次の七つの点で従来の創価教育学説研究の限界を超えており、この学説に対する正しい理解を広げることに役立つとともに日本における今後の教育学説研究に貢献するところが大きいように思われる。

- ① 知識社会学的研究の枠組みにより教育学説の形成過程を著者の思想形成と政治的経済的文化的事象の変容と重ね合わせてダイナミックに把握していること。
- ② 思想形成の過程を幼少期、青年期にさかのぼり、その社会的環境を実証的に明らかにし、学説を支える思想的基盤—思考パターン—の深層を明らかにしていること。
- ③ 創価教育学説の展開を、モダン（近代性）を中軸にしてポスト・モダン（超近代性）とプレ・モダン（前近代性）の概念を用いて発展的に考察していること。
- ④ 異常にナショナリズムの高揚した時代に人間の幸福を教育の究極の目的としながら、その目的達成のために教育を科学的方法で研究し、学校を社会と合理性・効率性の視点から運営すべきであると主張した学説の展開を時代状況との関連で明瞭にしていること。
- ⑤ 牧口の思想における「人生地理学」「教授の統合中心としての郷土科研究」と創価教育学説との連続性を系統的に示していること。
- ⑥ 創価教育学説を発展的に形成されたものとみて、信仰の世界に入る以前と以後の二段階に分けて考察し、信仰が価値論の性質を変容させ、教育観の発展をもたらしたことを明らかにしていること。
- ⑦ 「存在被拘束」の点からみてナショナリズムの強いインパクトを受けながら主体的選択によって幸福主義の教育学を構築し、その立場を貫いたことをあきらかにしていること。

以上の諸点は、創価教育学説研究の新たな発展に資するだけでなく、教育学の研究に新たな知見を提供したものとして意義の深いもの、と評価できる。

もちろん、本論文は完全無欠に完成されたものというわけではない。たとえば、大正・昭和初期における各種の理論的教育学の内容について分析に足りない点が認められること、「価値創造」という用語の由来に関する検討が十分になされていないこと、創価教育学説の基底に脈打っているエコロジカルな思想についての考察が乏しいこと、価値論の変容をもたらした要因についての考察に不十分な点が認められこと、牧口および創価教育学説の取り上げ方に主観的要素、ある種の先入観がやや過剰に作用していること、などの問題点が認められるし、用語の使い方、表現・論述の仕方にやや不適切と思われる点がないとはいえない。しかし、創価教育学説の研究に取り組んだ真摯な姿勢、本論文の内容に示された客観的で公正な論述をめざす努力は、森君が今後、これらの問題点や不適切さを十分に克服しうることを保証しているように思われる。本論文は、学位請求者、森君が研究者としてすぐれた資質をそなえており、教育学研究の分野における今後の活躍を彼に期待してよいことを示している、とあってよい。

森君は、これまでに創価教育学説に関する研究発表を日本教育学会全国大会で 2 回、日本教育政策学会の全国大会で 1 回、全国規模の学会であわせて 3 回にわたって行い、その研究内容について注目されている。また本学大学院紀要には創価教育学説に関する研究論文を 5 本、掲載している。このように創価教育学説の研究について業績が多く、彼をこの分野の専門的研究者とみなすことは、きわめて当然のことである。

以上に述べたことを総合して、森君が提出した論文「創価教育学説の成立に関する研究」は、博士の学位を受けるに値するものと認められる。

【最終試験の結果】

最終試験は、審査委員 3 人の出席のもとに 2005 年 12 月 21 日午後 1 時から教育学部学部長室で行われた。1 時間半を越す口述の試験では、主に次のテーマについて審査委員の側から質問が行われた。

- ① 大正・昭和期の哲学・教育学・経済学の分野における価値概念と比較した場合の創価教育学説で用いられる価値概念の特質、および、この概念が用いられるにいたる経緯について
- ② 創価教育学説における価値論の変容について
- ③ 創価教育学説において強調される科学の概念および応用科学としての教育学という見解、その研究方法論について
- ④ 創価教育学説における個性尊重論批判について—その背景と意味について
- ⑤ 青年期までの牧口の人間形成と創価教育学説の特質との関係について

- ⑥ 創価教育学説における社会の強調および社会学の重視について—その背景と意義について
- ⑦ 「存在被拘束」の概念を手がかりとする知識社会学的研究の枠組みと日本ナショナリズムの高揚など時代の社会的事象に対する牧口の主体的選択との関係について—創価教育学説の成立を考察する場合における「存在被拘束」概念の意義と限界について

以上のテーマをめぐる質問は、創価教育学説の本質とその成立の根本にかかわるものとして出されたが、森君は、周到に、慎重に、丁寧に言葉を選びながら応答した。答への要点は、次のとおりである。

①価値論については同時代の理論的教育学や哲学で展開された規範的価値論と異なり限界効用学説の立場をとる経済学に近い相対主義的なものであること、②価値論の変容については信仰に入って「法」に依拠する生活の必要を自覚したこと、③青年期までの経験が創価教育学説の基底にある現実主義的でプラグマティックな感覚と発想を育んだこと、④教育研究の方法として科学—実証性と帰納的方法を強調したこと、⑤青年期に社会有機体説を説く社会学の影響を強く受ける一方、経験にもとづいて個人の生活と教育の実際をリアルに直視したゆえに社会を重視し、社会学に研究上の理論と方法のよりどころを求めたこと、⑥人が社会共同体の構成員として集団の中で生活する現実を重視したゆえに単純な個性尊重論を批判しなければならなかったこと、⑦創価教育学説の成立においては、「社会的存在」が強烈なインパクトをおよぼす状況のなかでの主体的選択が重要な意味をもつこと。

以上の回答は、創価教育説についての研究の深さと広さを示すものであり、ほぼ満足すべきものであった。よって最終試験を合格と判定した。

3人の審査委員は、論文審査と最終試験の結果を総合し、森君に博士の学位を授与することは、適当であるとの判定で一致した。

なお1月11日午後4時30分から教育学部棟のB202教室で、上記学位請求論文の公開発表会が行われた。2時間におよぶ発表会では、充実した質疑応答が展開され、閉会のさいには、参加者から拍手が起こった。